

想いを綴る心の旅

「ヘレン・ケラー」奇跡の人」の芝居作り

アメニティー・フォーラムがやつと終わった。今年も全国各地から、三日間で延べ5千人を超える人たちが参加した。そこで福島智さんに久しぶりにお会いした。福島さんは9歳で失明し、18歳で聴力を失い、その後、母親が考案した指点字によってコミュニケーションを回復した。現在は、東京大学先端科学技術研究センターの教授として、教鞭をとっている。ヘレン・ケラーと同じ障害である。

アメニティー・フォーラムでは、元宮城県知事の浅野史郎さんと一緒にオープニングトークへのご登壇をお願いしていた。浅野さんは成人T細胞白血病を3年前に患い現在も療養中であるが、二人には、自分の運命をどう受け止めたか、そして、人生はいかに生きるべきかについてお話しただこうと思っていた。福島さんは体調を崩されていたが、浅野さんが急な都合で欠席されることが分かると、その悪い体調を押しながらも、大津まで出向いてくれた。「一緒に戦う仲間ですから」と。

福島さんとの出会いは、私が「ヘレン・ケラー」という芝居作りに関わっていた時に、盲ろうという障害を持つ人と出会いたくて、厚生省(当時)に相談をした時に遡る。かれこれ20年前になる。当時、私は知的障害者支援施設「信楽青年寮」の職員であったが、ふとしたこだわりから自分で芝居を作ってみようと思い、多くの人に呼びかけていた。その題材が、「ヘレン・ケラー 奇跡の人」である。今回は、この芝居作りから考えたことについて書いてみたい。

盲ろうという過酷な運命を引き受けて生まれてきたヘレン・ケラーと、その家庭教師であるアニー・サリバンの物語は、あまりにも有名な話である。二人の物語は、『奇跡の人』という芝居として繰り返し上演されてきた。私は、幾つかの劇団の舞台を観ていたが、このサクセス・ストーリーにどこことなく違和感を覚えていた。

ヘレンの片方の手に流れる冷たい「それ」と、アニーによってもう一つの手のひらに綴られる、water

という「語」が、同一のもので、さらにその冷たいものの「名」であることを知る瞬間は、人々の涙を誘ってきた。そして、そのことは一般に、ヘレンが障害を乗り越えた「証し」として、多くの人々に受け止められてきたように思う。

見えず、聞こえず、話せない、わがままな「動物」であったヘレンが、言葉というものを知ることによって、「人間」になる瞬間である。そして、人は努力をすれば何事も実現できる」と人々を激励する時に、引用されてきたエピソードでもある。人が生きていく上で、言葉の持つ意味は大きい。私が観た『奇跡の人』は、その部分だけが、デフォルメされ演じられていた。

しかし、ヘレンが言葉を獲得する前に抱いたであろう、何かを理解したいという想いや、やるせなさ。ヘレンの心を深く知りたいというアニーの願いと愛情。自分というものと、自分以外のものたちの存在を知りたいと、もがき続けていたであろうヘレンの本能。そういう部分に焦点を当てながら、二人のコミュニ

ケーション(関係性)の在り方とこだわって芝居作りをしなければいけないのではないかと、勝手にそう思っていた。その葛藤を丹念に描くことで、かの有名なwaterのシーンは、ヘレンが自分自身と出会う瞬間になるのではないかと。そうすれば人間の深さについてもっと深く洞察ができ、その本質に触れることができるのではないかと。

障害者施設の職員でありながら、舞台制作をしたいという強い自己主張は、友人たちの手を借りることで実現することになる。脚本は、重度の障害をもつ学生時代からの友人・松兼功君が鼻先でパソコンのキーボードを叩きながら書き上げ、音楽はアメニティー・フォーラムで恒例となつた音楽家・小室等さんが担当してくれた。劇団は東京演劇集団風。芝居作りに参加しながら、いくつも気がついたことがあった。その中の一つは、人はいつもたくさんの試みで心を発信しているということである。特に言葉は心を発信するのに身近で、共通性が高いツールだ。し



かし、その「言葉」という同じ記号でも中身が変わることがある。例えば「好きだ」という言葉を発する時に、「本当はそうでもないけど」という意味が含まれていることもあるなど。

ヘレン・ケラーは、「言葉」を獲得したことで何かを掴み、世界が広がったことは間違いないであろう。しかし、もっと私たちが知らなければいけないことは、*water* というあの瞬間に、ヘレンによって理解されたアニーがいて、また、アニーによって理解されたヘレンがいたという事実である。

心が通い合った、そのことが重要であり、率直に感動する。その感動はヘレンが障害を「乗り越えた」ところにあるのではなく、コミュニケーションを願う「強い意欲」からくるものではないかと。そのことが人間の本能でないかと。人が人と出会うという一瞬の可能性にこそ、その能力と意欲は試されるのであって、私はそのことこそ、コミュニケーション力なのだと感じた。

アニー・サリバンとヘレン・ケラーは、著しく限られたコミュニケーション手段で、どれだけの出会いを、どのように繰り返していたのだろうか。コミュニケーション手段が限られて

いる分、私たちがお互い分かり合えたいと思うばかりに、取り逃がしているような小さな触れ合いも、集中した豊かなコミュニケーションで補っていたのかも知れない。稽古が進めばそれだけ、ラストシーンはクライマックスではなく、その後、幾度となく繰り返したであろう二人の出会いの一場面であり、*water* は、その通過点に過ぎないという思いを確かにしていた。

人は人と出会い、楽しさや美しさ、そしてお互いを感じるために生きていく。その時、言葉が果たす役割は重要だ。しかし、お互いを理解したいという情熱や、相手に対する優しさが必要ならば、人を理解することは容易ではない。ましてや、出会い方によっては、その情熱が沸き上がってこなかったり消滅したりもする。人は多面的なので、どういう場面でどう出会うかによって印象は大きく変わるし、それに伴って情熱や優しさも変化する。

アニー・サリバンのような気力と愛情は難しいかも知れないけれど、その人を理解したいという想いをもち続けなければ、たくさんの言葉も宙に舞ってしまい相手の心には届かない。一番身近なコミュニケーション

ション手段であるはずの言葉が周りに溢れていても、孤立感さえ感じてしまう。

福祉サービスを利用する人たちに限らず、一緒に働く人たちに對しても同じだと思う。言葉は何も役に立たなくなることがある。

ヘレン・ケラーとアニー・サリバンの出会いが、そうであったように、私たちと障害のある人や高齢者、そして、職場の同僚に対しても、お互いを理解したいという情熱を忘れずにいたいと思う。

福島さんは私にこう言った。「盲ろう者となって最も辛かったのは、景色が見えなくなったことでもなければ、音楽が聴けなくなったことでもない。他者との直接的コミュニケーションが極めて困難になったというところ。一向に孤独は癒されず、乾ききった心に潤いは訪れなかった。私が盲ろう者としての『再生』を実感できたのは、指文字という方法を使得って、他者との生きたコミュニケーションを復活させることができてからのこと」と。

さらに、「人は自分一人では自分の存在や意味を感じられない。他者との交流によって、そこに反射され映し出される『影』としての自分自

身の存在を見出すことにより、人は初めて自分自身を認識するのではないだろうか。人が誰かと交流したいと思うのは、自分の存在を確かめたいと思うからなのではないか」とも教えてくれた。

こんな風に『奇跡の人』の芝居作りのことを、アメニティ・フォーラムでの福島さんとの楽しい一時を過ごしながら思い出していた。

様々な情報技術が発達することで「言葉」の意味するものが多様化し、直接的コミュニケーションよりも、簡易で間接的なコミュニケーションが溢れる現代社会で、人が孤独にならない社会を創りたい。この、人が孤独にならない社会というのは福祉の原点であったはず。その人のことを思っけて語りかけること、心が通い合う社会であること、これが私たちが大切にしなければならぬことである……などと、アメニティ・フォーラムを終えて一呼吸置いた今、あの時の気づきや考えに、今の自分の思考を重ねることを繰り返している。